

イスラエルと教会#5

ジェファソンビル インディアナ州 アメリカ合衆国

1953年03月29日

1 …そして今夜、私たちはイスラエルの民を再び「故郷」へと置きたいと思います。主の祝福がありますように。

今朝は「質疑応答」でした。本当に——たくさんいただきました。私は朝の9時ごろから始め、終わったのは2時半でした。それでもまだ、答えきれない質問がポケットいっぱいに残っています。種類もいろいろです。

来週には、できるだけそれらに取り組みたいと思います。ここにも、まだ目を通しきれていないものが山ほど積まれています。できる限り早く取り上げますから、どうぞお待ちください。

トム兄弟にも、来週もずっと共にいていただけたらと願っています。このあたりには説教者がたくさんいますから、誰かが声を枯らしても、すぐ隣の兄弟が立ってくれますからね。

2 このような種類の「リバイバル集会」を開くのは、実に7年ぶりのことです。

ちょうど来週で、私がこのタバナクル(幕屋)で最後のリバイバルをしたあの日から、7年が経つわけです。この間はずっと「癒しの集会」でした。

群衆の規模だけを言えば、たしかに10万人規模の集会もありました。しかし、わたしはそれ以上の「良き時」を過ごしたことはありません。

昨夜などは、ライト兄弟、私はまるでクローバーを食べて喜んでいる馬のように、もう喜びにあふれてしまっていました!

主が、本当に祝福してくださったのです。

そして今日もまた、主はあまりに豊かに祝福してくださり、私たちはもう、建物が揺れるほど喜んでいました。まるで昔の「キャンプ・ミーティング」で“家が揺れるほど”の賛美が起こる——あの雰囲気です。

本当に、良い時を過ごしました。主が祝福してくださいました。そして私たちは、今夜も主の祝福を信じています。

今朝は、非常に重要な質問がいくつも出て、深い聖書の主題について話し合いました。

3 そして、今度の金曜日の夜は「十字架のメッセージ」を取り上げる予定です。

主の御心なら、金曜の夜に、私たちは主を十字架へのご案内し、主がどのように苦しみ、どのように十字架で死なれたかを見つめます。そして、土曜日の夜まで墓の中にとどめます。

しかし日曜日の朝——「イースターの夜明け礼拝」では、主がご自身をどのように証明してくださるか、お見せしたいと思います。

そのあとに、もし主がゆるしてくださるなら、大きな癒しの集会を持てたらどんなに素晴らしいことでしょうか!

高校の体育館でも借りて、何千人でも押し寄せてもらって、癒しの集会をしたいものです。新聞やラジオでも告知し、大勢の方が来るでしょう。

癒しの集会は、私の召しです。病の方々のために祈る——その領域で、主は多くの驚くべき経験を私にくださってきました。

4 私は信じています。主が今、ある備えをしておられることを。

私がフィールドから呼び戻され、ここに腰を据えることになったのも——おそらく「7年の記念」であり、主が次の段階を引き上げ、新しい領域へ進ませようとしておられるのではないかと……そう感じています。

「敵が大水のように押し寄せるとき、主はそれに向かって標準を掲げる」と言われました。

今夜は、このみことばを読みたいと願っています。

5 さて、すぐ後に「バプテスマ式」が控えていますので、長くはお話しません。

……と、毎晩のように言っていますが、結局、皆さんを2時間半も座らせてしまって、まるで試練のようになってしまいますね。

しかし今夜は、そうはできません。今夜は、何名もの方がバプテスマを受けられるからです。

イースターの朝、夜明け礼拝のすぐあとにも、ここタバナクルで「水のバプテスマ」を行います。

今夜も、すでに準備ができています。

私たちは「バプテスマ」に関しては、とてもバプティスト的です。…と言っても、宗派としてのバプティストではなく、聖書的でありたいというだけです。

私たちは、「水に沈めるバプテスマ」——浸礼を信じています。

もし皆さんが別の理解を持っていても、それは問題ありません。

しかし、私たちは、聖書が示すとおり、水に沈めて浸水のバプテスマを信じ、実践しています。

6 さて、ここに一つのみことばがあります。

私は——もう何年も何年も、特にこの4年間、これがずっと心に迫っていました。

失敗することがほとんどなく、聖書を手に取ると、必ずと言っていいほどこの章に開くのです。

そして、ほんの少し前まで気づきませんでした。今夜のこのメッセージの「締めくくり」と、見事に結びついていたのです。

7 来週、私たちは創世記かどこかに戻るかもしれません。主が導かれるので、来週はまだどこに行くのかわかりません。しかし、今夜は...

8 しばらく前にここで病気になったとき...私は病気ではありませんでした。私はただ壊れていました。私はちょうど何時間も滞在しました、私はプラットホームを離れることなく、離れることなく、8日と夜の間祈りの列に座っていました。私の食事を取り、プラットホームで寝ていることをしました。そして私は、「できれば、みんなのために祈るつもりです」と言いました。そして私が去ったとき、祈られるべき街には2万8千人、2万8千人がいました。まあ、それは新聞のアカウントです。新聞が彼らがそこにいると言ったとき、ジョーンズボロ・サン、彼らは皆そこにいました。さて、これは...

9 (兄弟が言う:「ビル兄弟、アーカンソーのあの集会のこと、今でも語り継がれていますよ。あのあたりへ行くと、誰も彼もが“ジョーンズボロのブランナム集会”の話をしています。」)

ああ、本当に素晴らしい時でした。

盲人も、聾者も、口のきけない人も、足の不自由な人も——あらゆる病が癒されました。

そこから、癒しの証しが世界中へ広がっていきました。

(兄弟:「今でも、あの集会で癒された人たちに出会いますよ、ブランナム兄弟。あれ以来ずっと癒されたままです。」)

それは素晴らしいことです。

皆さん、聞こえますか?

ええ、そうです。

神は“つぎはぎ”をされません。完全に癒されるのです。

主は完全な健康を与えてくださいます。

ああ、またあそこへ行って、もう一度集会を開きたいものです。

(兄弟:「アーメン!兄弟、みんなあなたを歓迎しますよ。あの山々や谷間のどこからでも人々が押し寄せます。)」

10 先日、メンフィスの集会をキャンセルしました。

本来なら「ユース・フォー・クライスト」主催で、大きなメモリアル・オーデトリウムを使う予定でした。

しかし、聖霊が“家に帰れ”と言われたのです。

ですから、私はここにいるのです。

なぜかは、私にはわかりませんが——

かつて主は、ピリポを大きなリバイバルのただ中から呼び出し、

「荒野へ行って一人の男に語れ」と命じられました。

ピリポはその通りにしました。

リバイバルの最中でさえ、それを離れて。

その通りです。

私たちは、神がお命じになることを、そのまま行うしかありません。

さて、ここが——

ヨシュア記 第1章です。

11 さて、インドへ行く幻についてですが……。

皆さんもご存じの通り、私がアフリカから戻ってきたあの朝、ベッドのそばに座っていた時のことです。

あの「幻」が現れたのです。

これまで私の癒しの集会に参加された方はどれほどいらっしゃいますか?

……ああ、たくさんおられますね。そう、あの幻がどのように示されるかをご覧になったでしょう。

ここで一晩だけ癒しの集会を行った時のことを覚えておられますか?

外は雨が降り、庭の周りまで人であふれかえっていました。

一人の少女が車椅子で連れてこられました。腰から下は石膏の粉のように硬直し、何年も完全に麻痺していました。

聖霊が彼女にしたこと、できなかったこと——すべてをお語りになりました。

彼女は言いました。

「もし神が私を癒してくださるなら、私は必ずそれを行います。」

私は言いました。

「主イエス・キリストの御名によって立ちなさい。」

その瞬間、彼女は立ち上がり、普通の人のように歩きながら建物の外へ出て行きました。

これこそが、問題の“原因”を聖霊が暴き出し、癒しを与える具体的な方法なのです。

原因が分かれば、癒しはそこから始まります。

癒しの話をする時、皆さんは「Only Believe(ただ信じなさい)」を弾き出して祈りの列を作ってしまうから、今は少し語り続けましょう。

12 さて、その幻の続きをお話します。それは私の前でパツと開きました。

一人の人が私のところへ来て、数枚の紙を持っていました。そしてこう言われたのです。「あなたが将来のことを思い巡らしていたゆえに——」

そう言って、その紙を天へ向かって放り投げると、紙は空高く舞い上がっていきました。その内容は聖書に書き留めてあります。

まるでタバナクルの“礎石”の中に置かれたあの予言のように、「終わりの日に何が起こるか」——皆さんもご存じのように、その通りに成就してきました。彼は言いました。「あなたの未来は、澄み切っている。」

「あなたが抱えていたあの問題——それはすべて取り去られる。もう二度とあなたを悩ませない。」そしてさらにこう言いました。

「もう一つ。あなたは“どのように集会を運営すべきか”について思い悩んでいる。」

13 よく、人は私にこう言います。

「オーラル・ロバーツは500人に祈る間に、あなたは2人にしか祈らない。」

しかし私はオーラル・ロバーツではありません。

神が私にくださったのは“この働き”であり、オーラルには“彼の働き”があるのです。

オーラルはたくさんの人に、手を置いて次々と祈っていきます——神が彼にそうさせておられるのです。

しかし私は、そこに立って「見届けなければならない」のです。

それが神のご命令なのです。

14 皆さん、よく注意しなければなりません。

これはとても危険な領域です。

もし神が、ある目的のために、誰かに何らかの“さばき”を置いておられたとします。

そんな時、預言者がそこへ行って、その“さばき”を取り除いてしまったとしたら……

その人がまだ神の目的を果たしていなければ、預言者自身が神の前に責任を問われるのです。

モーセを見てください。

神は「岩に語りなさい」と命じましたが、モーセは腹を立てて「岩を打ちました」。

神はそのモーセを厳しく取り扱われました。

エリシャを見てください。

若い預言者で、若くして禿げていました。

子どもたちが彼を嘲り、「ハゲ頭よ、上っていけ!」と笑いました。

怒ったエリシャは、主の名によって彼らを呪いました。

すると雌熊が出てきて、42人の子どもたちを殺しました。

これは“聖霊の優しい性質”ではありません。

怒った預言者の行動なのです。

だからこそ、注意深くなければなりません。

15 ヨハネでさえ、こう言いました。

「火を天から呼び下して、彼らを焼き尽くしましょうか？」

イエス様は言われました。

「あなたがたは、自分の霊がどのようなものか、まだ分かっていない。」

だから私たちは、慎重に、静かに歩み、

聖霊が何と言われるかだけを見て進まなければならないのです。

16 最近、若い女性が私の家に来ました。

彼女はこれまで50回は油注がれ、何度も祈られ、あらゆる手を尽くされていました。

その朝、私は部屋に座っていると、主の使いが近づき、彼女の心の奥にある“8年間も隠してきたこと”を語られました。

誰に言うこともできず、精神科医でも取り出せなかった秘密です。

彼女は気を失い、床に倒れ、泣き始めました。

私は言いました。

「それを正しに行きなさい。そうすれば神があなたを癒してくださる。」

彼女は夫のもとへ行き、そのことを正直に告白しました。

そして戻ってきた時――

彼女は完全に癒されていました。

彼女は夫のところへ行き、その問題を正直に告白して、きちんと“正しました”。

そして再びここへ戻ってきました。

彼女は、今日も完全に癒されています。

この建物の中で、私が今話しているその人が誰かわかる方はどれほどおられますか？

多くの方がご存じでしょう。

もし私の記憶が正しければ――

その婦人は、今この会堂のどこかに座っておられるはずです。

とても恥ずかしい出来事でした。

しかし――

神がその働きを成し遂げられたのです。

17 見てください。

どれほど祈り、どれほど油を塗り、どれほど悪霊を追い出そうとしても……

彼女は自分の“罪”を心の奥深くに隠していたのです。

しかし聖霊は、その秘められた部分を光にさらしました。

そして彼女がそれを正した時――

癒しが来たのです。

神は“罪の上”に祝福を置くことはなさいません。

まず清められなければならないのです。

18 その幻の続きで、主はこう言われました。

「あなたは、“導かれるままに”行きなさい。」

そして私は南アフリカのダーバンへ連れて行かれました。

最後の集会では10万人が集まり、

一日に3万人もの人が主に立ち返りました。

再びそこに座っていると、主はまた別の群衆を見せられました。

群衆が引いていくと、別の光景が示されました。

天使が光をもって私の方を照らし、

私は海のような人々を見ました。

インドの服をまとった人々でした。

私は尋ねました。

「この人々は誰ですか？」

私のそばに立っていた、あの写真にも写っている御使いが答えました。

「この集会には30万人が集まる。」

19 皆さん、どうぞ聖書に書き留めておいてください。私がインドから戻るとき——一度に30万人が集まったという報告が必ずなされます。10万人の回心が起こると期待しています。共産主義が40%のインドを席卷している今、これを食い止められる唯一の方法は、神の力そのものが証しされることです。

20 ほら、もし教会が「読み書き計算」しか与えられないのであれば——

インドの魂は救われません。インドの人々、アフリカの人々、そうした民族は、神の力が“目に見える形で”現れるのを必要としているのです。

50年もの間、宣教師を送り続けても、“クリスチャン”のはずの人々でさえ、小さな泥の偶像を脇に抱えていました。彼らに癒しのことを語っても、宣教師は言いました。「そのような奇跡の時代はもう終わった。神学校の教えでは、そんなことはもうない。」しかし彼らは偶像を抱えていました——癒しを求めて。偶像が癒すものではありません。

癒しておられたのは神でした。

神は彼らの無知をあわれんでくださっていたのです。

21 私は彼に言いました——

宣教師が語っていたまさにその神こそが、すべての癒しの“元締め”であり、その場で神が癒されることを皆に示したのです。

すると彼らはキリストを受け入れ、ジャングルへと帰っていきました。

その中の一人は今や、一週間に平均一千人をバプテスマしているのです。

生まれながらの現地人が——これこそ本物の宣教です。

神は、速やかに、大いなる働きを進めておられます。

“Wings Of Healing(癒しの翼)”を聞かれたことのある方は？

ワイアット博士、そして私の親しい友人レイモンド・ハックスター。

彼もここタバナクルで説教したことがあります。

彼は東インドへ行き、大いなるリバイバルが起こり、何千もの魂が救われました。

皆さん、神が今なされていることをご覧ください。

22 ちょっと、例えをお話ししましょう。

ここに一つの“層”があります。

その上にもう一つ。

さらに上にもう一つ。

下の層——これは“名目上の教会”(ノミナル教会)です。

その上の層——これは少し霊的な教会、恵みを多少受ける“フルゴスペル”の人々です。

そして、その上にある高い層——

ここが、私たちが行くべき場所です。

天国のすぐ隣、神のみ力がしたり落ちてくる領域。

神の祝福は、ここからこの中層へ、さらに名目上の教会へと滴り落ちていきます。

名目上の教会は、ほんの“しずく”だけを受け、

儀式や形式にとどまり、生温い信仰の中にいます。

中層の教会は、多少恵みを受けますが、そこから“イズム”に迷いこむこともあります。

しかし、

私たちは“最上の層”まで引き上げられなければ、携拳(ラブチャー)を迎えることはできません。

絶対にです。

23 どうぞ皆さん、これを聖書に書き留めてください。

私は赤ん坊のころから、

あの“火の柱”が現れ、

母は十五歳で私を産んだ時、窓を開けた瞬間、その御使いが入って来られたのです。

それ以来、主は一度も“誤ったこと”を私に示されたことはありません。

私はこの生まれ育った町に今もおります。

どうぞ、街の誰にでも聞いてみてください。

“主の御名によって語られたこと”で、成就しなかったものが一つでもあったかどうか。

ありません。

だからこそ、私は確信しているのです。

—これは神の御業です。

24 さて、その幻の終わりに、私の聖書が私の方へと近づいてきました。

すると聖書はヨシュア記1章に開いたのです。

それ以来、このみことばが絶えず私の前に置かれています。

離れようとしても離れません。

今夜、それを読みたいと思います。

イスラエルの子らが川を渡る場面です。

ヨシュア——偉大な指導者。

読み終えたら、民数記に戻り、続きを学び、

あと20～30分程度でまとめます。

そのあと洗礼式を行います。

25 では、ヨシュア記1章を読むにあたって、皆さん、どうかよく耳を傾けてください。

モーセの死の後——

私たちは昨夜、ちょうどその場面で終わりましたね。

そうでしょうか？

モーセをどこに残したか、覚えていますか？

丘の上に立ち、民に向かって“さようなら”と手を振っているところでした。

そして彼は、そこでこの世を去ることになっていました。

横たわりながら、彼がふと目を向けると——

そこには“岩”が、彼のすぐそばに立っていたのです。

モーセは、その“岩”の上へ一歩、静かに踏み出しました。

その瞬間——

御使いたちが天から舞い降り、

彼をやさしく抱き上げ、

天へと運んでいったのです。主のしもべモーセの死後…

主はヌンの子ヨシュアにこう語られた。

「モーセは死んだ。さあ立て。

あなたとこの民はヨルダン川を渡り、

わたしが彼らに与える地へ行きなさい。」

「あなたが足の裏で踏む所をすべて、

わたしは与える。」

「モーセと共にいたように、

わたしはあなたと共にいる。

あなたを離れず、見捨てない。」

「強くあれ。雄々しくあれ。」

「この律法の書を口から離さず、

昼も夜もこれを口ずさみ、

そこに書かれたすべてを守り行え。

そうすればあなたは成功する。」

「恐れてはならない。

おののいてはならない。

あなたの神、主が

あなたの行くところどこへでも

共にいるからである。」

26 それでは民数記に戻り、昨夜の続きへ入ります。

イスラエルの子らはエジプトを出て荒野に入りましたが、
彼らはつぶやき始めました。

すると神は“燃える蛇”を送り、

民は次々と噛まれ、死んでいきました。

そこで神は青銅の蛇を造らせ——

これは“神の裁き”を象徴しています。

青銅は常に「神の裁き」を表します。

創世記3章、

出エジプト記17章の青銅の祭壇、

エリヤの時代の「空が青銅のように閉ざされた」記述。

青銅＝神の裁き

なのです。

27 今日、諸国民は“青銅のよう”になっています。

象徴は——

裁きが間近に迫っているということです。

私は、今が世界史の終わりに近い時代だと信じています。

神の裁きが国々の上にあるのです。

私たちがキリストを退け、

不義を続けてきたからこそ、

共産主義が土台を奪い取ったのです。

28 なぜキリスト教が“基準(スタンダード)”を掲げられないのか？

それは、キリストに力がないからではありません。

人々が死を選んでいるからです。

神の力は十分です。

しかし、人々は神を信頼し、

“あの高い領域”に踏み出すことを恐れているのです。

「そして勇気をもって、主をそのまま信頼し、
主のみことばをしっかりと受け取りなさい。」

29 モーセは——そこで神に対して失敗しました。

そしてモーセという人物は、**教会組織そのものの完全な型(タイプ)**なのです。

失礼ですが、兄弟姉妹の皆さん、どうかよく聞いてください。

あらゆる出来事は“影”であり“型”でありました。

そして今日、人々はこう言います。

「私は〇〇教団に属しています。」

「私はメソジストです。」

さらに、ペンテコステ派やホーリネス派の人々までもがこう言います。

「私はアッセンブリー教団です。ここが一番です!」

「私はチャーチ・オブ・ゴッドに属しています!」

(ブラナム兄弟 パチン と指を鳴らす)

神は、そのどれについても、それほど関心を持っておられません。

いいえ、まったくです。

神が心を向けておられるのは——

“個人の魂”です。

そして、

神を信頼し、みことばに踏み出す勇気を持った
一人の男、一人の女。

神は、そうした人にご自身を現されるのです。

30 モーセは、組織化された教会の型でした。

彼は“律法”そのものの象徴でした。

そしてモーセは、民の前で

神をあがめる代わりに、自分をあがめてしまったのです。

その時——神はモーセから顔を背けられました。

今日の教会も同じです。

神をあがめる代わりに、自分たちをあがめ始めています。

もっと多くの会員、

もっと立派な教会堂、

もっと高価なオルガン、

もっと豪華な腰掛け、

より大きな建物——

彼らはそのようなものを追い求めています。

しかし神は、(ブラナム兄弟 パチン と指を鳴らす)

そんなものに、ほんのこれっぽっちの価値も置かれません。

あなたがたは、神をあがめるべきなのです。

私はむしろ——

町外れの薄暗い路地にある小さなミッションでも、

そこがきれいに整えられ、

魂が自由にされ、

心から賛美し、叫び、

神を喜ぶことのできる場所であるなら、

世界中のどんな壮麗な大聖堂よりも、

そちらを選びます。

アーメン。

その通りです。

神は、“教会時代”で終わられるです。

31 さて、よく注意してください。神はモーセをお責めになりました。

それは、モーセが自分をあがめ、神をあがめなかったからです。

そして今日を見てください。大きな教会がみな、自分たちの教会へ、

自分たちの組織へ人を引き込もうとしています。そしてあらゆる説教者が——自分の帽子に“羽根飾り”をつけようとしているのです。

“自分の名声”を得ようとして、引っ張り合っています。

彼らはこう言います。「私は地区長になれるかもしれない。」

「私はあの役職につけるかもしれない。」「これやあれのトップに立てるかもしれない。」しかし兄弟よ——私はそんなものより、キリスト者でありたいのです。男も女も、組織でも肩書でもなく、ただキリストが必要なのです。

32 ああ、彼らのやっていることを見始めると——

その姿を見ると、本当に胸が痛みます。

少し前のことです。

アフリカから帰り、短い休暇を取って北の森へ向かいました。

アラスカの国境近く——舗装道路から千マイルも離れた場所です。

私は馬に乗り、六日間も奥地へ入り、

すべてから離れようとしていました。

その奥で馬を走らせていたある日、

突然、馬が大きく驚きました。

グリズリー(大きな熊)が立ち上がったのです。

馬は怖がって走り出しました。

そこは、昔山火事で焼けた場所で、

大きな背の高い木々がたくさん立ち並んでいました。

月明かりの中で、白くそびえ立ち、

まるで堂々として強そうに見えるのですが——

命はどうに死に絶えていたのです。

私は風のうなる音に耳を傾けました。

風が山の方から吹き下ろしてきて、

あの木々を揺らすと——

木々はただ、

キーツ、ギーツ……

キーツ、ギーツ……

と、か細く軋むだけでした。

33 ヨエル書にこうあります。

「バッタの残したものを、いなごが食い、

いなごの残したものを、蚕(かいこ)が食った。」

あの教会の姿——

まさに、あの木々と同じです。

かつて彼らは、

メソジストも、バプテストも、長老派も、

そしてペンテコステ派も、

“生きた偉大な像” のようであったのです。

しかし、今ではどうでしょう。

この世の炎と熱風が、

彼らの皮(樹皮)を焼き尽くし、

生命の流れを奪い去り、

今は——

まるで巨大な墓石の集まりのように、

ただそこに立っているだけなのです。

命はまったくありません。

アーメン、その通りです。

そして、

天から“激しい大風が”吹き降ろされると――

彼らがすることと言えば、ただ、

キーツ、ギーツ……

キーツ、ギーツ……

とうめき、

文句を言い、

反対し、

その働きに逆らうだけなのです。

ハレルヤ!

今必要なのは――

ただ“受け入れる人”なのです!

34 そして私は気づきました。

あの場所の“若い木々”は――

しなやかで、柔らかく、

風の中で自由に揺れ、踊るように揺れ、

まるで楽しんでいるようでした。

私は言いました。

「ああ、これはまさに、昔ながらの、

神から送られる“聖霊のリバイバル”そのものだ!」

ハレルヤ!

教会に“しるし”や“奇跡”が現れ始めると、

あの古い、大きな教会はうめき始めます。

「私はそんなものは信じない。」

「そんなのは熱狂だ。」

「奇跡の時代は終わった。」

しかしその時も、

同じ聖霊の風が、

彼らをうめかせながら、

若い木々を自由に踊らせているのです!

ハレルヤ!

そして、あの若い木を揺さぶると――

揺らされるたびに、根の“土”がほぐれ、

もっと深く、しっかりと根を張れるようになるのです。

ハレルヤ!

これこそ、今夜 私たちに必要なものです。

昔ながらの、

聖霊による大きな“揺さぶり”——

そうして私たちは

もっと深く、もっとしっかりと、

神にしがみつく者となるのです。

聖霊があなたを揺すり、引き寄せるとき、

それは——

根の回りの硬い土をほぐし、

あなたがさらに深くキリストの中に根を下ろすためなのです。

「キリスト・イエスにしっかりと根ざし、

そして土台の上に建てられなさい。」

癒しの経験、

聖霊のバプテスマの経験、

御霊の賜物の経験——

そのすべてが、

嵐が強く吹けば吹くほど、

あなたをキリストの中に深く、強く、

しっかりと繋ぎとめてくれるのです!

ハレルヤ!

35 教会がキィキィと軋んで、

うめいたり文句を言ったりしたいなら——

好きにさせておきなさい。

彼らが

「奇跡の時代はもう終わった」

と言いたいなら——

言わせておきなさい。

どうせ、彼らは“死んでいる”のです。

「ああ、でも私たちは教会です!」

彼らはそう言います。

あの枯れた木々だって、

かつては堂々とした木だったのです。
しかし、見てください。
樹皮は焼けて blister(ただれ)て落ち、
生命が流れる道が完全に失われている。
樹皮がなければ、
木の“命の汁・樹液”は幹をのぼっていきません。
もし樹皮が残っていて、
生命が上へと運ばれたなら、
あの木々は再び生き返ったことでしょう。
しかし現実には——
彼らは自分たちで“儀式”を造り、
“形式”をつくり、
“宗派の殻”をまとい、
結果として、樹皮が全部剥がれ落ちてしまったのです。
だから、
風が吹けば吹くほど、
ただキィキィ、ギィギィと軋むだけ。
命の流れはまったくありません。
しかし——
神はそれでも、同じ風を送っておられるのです！
その横で、小さな教会——
ほんの“ひと握り”の忠実な者たちが、
その同じ聖霊の風を受けて、
喜びの中で揺れ、
自由に賛美し、
大いに楽しんでいたのです。
ああ、なんということでしょう！
私たちは、教会に“神の力”が必要なのです！

36 さて——イスラエルが旅立った時、
モーセはすでに死を迎えるところでした。
そして民は、約束の地へ向けて歩み始めたのです。
(時間が限られていますから、少し急ぎますね。)
約束の地へ向かって旅をしていると、

その道の前に、ある人物が立ちはだかりました。

一人の古い王がいました。

この大勢のヘブル人の群れが自分の領内を通ると聞いて、

その王はひどくうろたえました。

彼は知っていたのです——

神がイスラエルと共におられることを。

そこで彼は“預言者”を呼び寄せ、

イスラエルを呪わせようと思いました。

その名は——バラム。

神はすでに「行ってはならない」と言われていたのですが、

バラムは、

古びた小さな雌ロバにまたがり、

二人の召使いを連れて

出発してしまいました。

向かっている先は——

イスラエルを呪うため。

バラムは心の中でこう言ったのでしょ。

「もちろん行きますとも。

あのホーリー・ローラー(聖霊で喜ぶ者たち)の集団くらい、

私が片づけてみせますよ。

任せてください。」

そう言って、ロバにまたがり、

その道をずんずん進んでいきました。

ところが——

しばらく進んだ時、

思いもよらないことが起こり始めたのです……。

37 その小さな雌ロバのほうが、その預言者よりも霊的な視力を持っていたのです。その通りです。ロバは、道の真ん中に立ち、剣を抜いて立ちはだかる“聖霊”を見たのです。するとロバは道をそれて畑に飛び出し、

その古い預言者の足を石に押しつけてしまいました。兄弟よ——

今日わたしたちに必要なのは、“もう少しロバに乗る経験”でしょう。そう思いませんか?その通りです。ロバは、「主の使い」がその道に立っているのを見たので逃げ出したのです。次に、聖霊はさらに狭い道へ移動し、

そこに再び立ちはだかりました。バラムはロバをむち打ち、

無理にその狭い道を通ろうとしましたが、ロバはどうとう——

その場に座り込んでしまいました。すると預言者は腹を立て、蹴ったり、棒で叩いたりしはじめました。

その時です——ロバが人間の声で振り向いて言ったのです。

「私は今まで、あなたに仕えてこなかったでしょうか？」

しかし、それほどの奇跡が起こっているのに、その預言者は怒りに燃えて、ロバの言葉に気づきもしませんでした。ああ、なんということでしょう！

38 もし神が、口のきけないロバの舌を用いて語らせることができるのなら——神に自分自身を完全に明け渡した男や女を用いることなど、

なおさらおできになります。ハレルヤ！そして次の瞬間、

預言者の目から“うろこ”が落ち、彼はついに気づいたのです。

道の真ん中に、聖霊——主の使いが立ちはだかつておられたことを。

バラムはそのあとも道を下って行きました。まだ、イスラエルを呪うつもりでいたのです。さて、ここで——ユダ書を見ると、この出来事の良い例が描かれています。バラムがバラクのところに到着すると、

バラクはバラムにイスラエルを見せようとしています。そこでバラムは祭壇を築きました。バラムは“預言者”でした。しかし、バラクはイスラエルを見せる時、イスラエルの“ほんの一部”、しかも最も見栄えの悪い部分だけを見せたのです。

39 そして、これこそまさに——今日、悪魔がすることと同じなのです。

悪魔は、あなたに“その物事のいちばん悪い部分”だけを見せるのです。

現代の神学校出身の説教者たちの一部にも、悪魔はこう囁きます。

「ほら、あのジョン・ドウを見てごらん。前にあそこに住んでいたあの男だ。彼は誰その妻と駆け落ちしたではないか。

あの“ホーリー・ローラー(聖霊で喜ぶ人たち)”の集団はもうこりごりだよ。」しかし——彼らは考えません。自分たちの“組織の中”にも、

同じことをした者がいるということ。その通りです。

しかし彼らは、それを“隠す”ことができるのです。

40 しかし、よく聞いてください。

バラクは、イスラエルを見せる時、

ほんの一部だけ——

そしてまた違う場所の一部分だけ——

次々と“限られた範囲”しか見せませんでした。

そしてバラムはこう思ったのです。

「イスラエルは間違いを犯してきた……。

神の暦に照らせば、やってきたことのほとんどが

“間違い”ばかりではないか。

こんな彼らを、聖なる神が呪わないはずがない。

必ず呪われるに違いない。」

そう信じ込んでいました。

しかし、バラムは——

お金に心を奪われすぎていて、

なぜ神がイスラエルを呪われないのか

その“理由”が見えていなかったのです。

彼は金のために目が曇り、

神の心を見失っていました。

そして、呪おうと口を開くたびに——

祝福が彼の口から出てくるのです。

預言のマントを取り、

比喩(パラブル)を語り出しても、

呪いではなく、

必ず“祝福”がイスラエルに返っていく。

そしてこう言わずにはられませんでした。

「おお、イスラエルよ……

なんと正しい、なんと美しいあなたの幕屋よ!」

呪おうとしても、

呪いは祝福へと変わってしまう。

それほどに——

神が彼らを愛しておられたのです。

41 バラムが見落としていたもの——それが今日、現代の説教者たち、そして現代の人々が“聖霊の教会”について見落としているものとまったく同じなのです。彼らはこう言います。「私は知っている。

あの人たちは自分をこれこれだと名乗っているが、あんなこともしたし、

こんな失敗もした。あのように吹き上がったたり、こんなふうに行き違ったり……」兄弟よ、私もそれを認めます。ええ、人々は間違いを犯しました。確かに、過ちも弱さもありました。しかし——バラムが見えなかった核心があるのです。バラムは見えなかったのです。イスラエルの先に立って進んだ“青銅の蛇(あがない)”“打たれた岩(キリスト)”

その贖いのしるしを!それは神の召し、神の選び、神の所有の民

という印でした。ハレルヤ!神ご自身が彼らを呼び出し、

彼らを分け別ち、彼らの前に青銅の蛇(贖いの象徴)

打たれた岩(キリスト)を置かれた。しかしバラムには、それが見えなかったのです。そして今日——現代の説教者もまた見えていません。聖霊の力、打たれたイエス・キリスト、そしてそのキリストの“からだ”の中に

私たちが置かれているという事実を。「一つの御霊によって私たちは皆、一つのからだの中へとバプテスマされた」(I コリ12:13)それが、“聖霊の教会”の中に働いている神の現実なのです。しかし現代の人々は、その前を進む打たれた岩——キリスト、青銅の蛇——贖い、御霊の臨在を見ることができない。バラムが見落としたもの——

それとまったく同じものを今日の人々も見落としているのです。

42 そして、モーセの最後の時が来たとき——ヨシュアが、モーセのあとを継いだのです。ヨシュアは、初めからずっと“陣営の中”にいた人でした。

ヨシュアとカレブは、最初にエジプトを出たときのあの最初の世代から、ただ二人だけが約束の地へ渡った者たちでした。

そのほかの世代はみな、不信仰のために荒野で倒れたのです。

そこで神は、まったく新しい世代を起こされました。

その新しい世代の先頭に立つリーダーとして神が選ばれたのが、ヨシュアとカレブでした。さあ、気づいてください。

教会が失敗し、組織や人間の力では立てなくなったとき——

それでも、その中には絶えず“霊”が働いていたのです。

しかし、その“霊”は長いあいだ認められていませんでした。

それが何か？聖霊の賜物、聖霊の現れ(御霊の働き)、

聖霊の力そのものです。そして今まさに、その“御霊の現れ”こそが教会を再び拾い上げ、前へ前へと押し進めているのです。

43 ご覧ください。

昔、イスラエルが旅をしていたころ——

彼らは宿営を張り、

その上には 火の柱 が立っていました。

そしてその火の柱が動くたびに、

民も必ず一緒に動いたのです。

火の柱は、

彼らの天幕の上に留まりました。

もしそれが

夜の十時に動いたなら——

あるいは

昼の二時に動いたとしても——

イスラエル中のラツパが

一斉に千本鳴り響きました。

すると全イスラエルは

天幕を畳み、

杭を抜き、

荷物をまとめ、

火の柱を追って旅立つのです。

ああ、なんという歩みでしょう！

今日もまた、

私たちがそうであったなら——

どれほど良いことでしょうか！

彼らは

火の柱に従ったのです。

そして火の柱が止まる場所で、

その下に宿営を張りました。

しかしこの“導き”は——

教会から失われてしまったのです。

44 そして——マルチン・ルターの時代。千五百年にも及ぶ“暗黒時代”のあと、ルターは火の柱が動くのを見たのです。すると彼は

カトリック教会の中から呼び出され、その火の柱に従いました。

そして彼に続いて、何万、何十万もの人々がその暗闇から外へと出て行ったのです。しかしその後——ルターは、その火の柱の下に“宿営を張ってしまいました”。そしてやがて彼らは、ルター派教会という大きな組織を作りました。ところがある日、火の柱は再び動き始めたのです。

しかし——ルターたちは動けませんでした。彼らは組織化されてしまっていたからです。そこにとどまらざるを得なかった。そのとき、

イングランドの片隅にひとりの小柄な男が立ち上がりました。

その名は——ジョン・ウェスレー。ルターはこう宣言しました。

「義人は信仰によって生きる」。しかしウェスレーはこう見たのです。

「イエスは私たちをご自身の血によって聖めるために、門の外で苦しみを受けられた」ウェスレーは“聖化”を見たのです。火の柱はルターの時代からさらに前へと進んでいました。しかしルター自身も、そしてその組織も、動くことができませんでした。組織に固められ、そこに留まらざるを得なかったのです。

45 兄弟よ、ここで一つ、はっきり申し上げます。

神は、聖書の中で“組織された教会”を

ひとつもお造りになったことはありません。

これは教義です。

カトリック教会は

「私たちが“母なる教会”だ」と言います。

その通りです——

彼らは“母教会”です。

組織というものの“母”なのです。

そして黙示録17章も、

まさに同じことを語っています。

その通りです。

彼らは 最初に組織された教会 でした。

そして、今日あるさまざまな組織教会は、

その母体から“枝分かれして生まれた娘たち”にすぎません。

黙示録17章を読んでみてください。

来週、そこに入っていきます。

さあ、よく注意して聞いてください。

46 そして――

ルターが動けなくなったその時、

ヨハン・ウェスレーが“火の柱”を見たのです。

彼はその後を追い、

火の柱について行きました。

ウェスレーは、

滅びかけていた三つ、四つの国々を

霊的に救った人物です。

道徳的に崩壊しかけていた国々に、

彼が“ウェスレー・リバイバル”を起こし、

それは世界を席卷し、

アズベリーらと共にアメリカにも渡り、

この国を救ったのです。

ところが――

やがてウェスレーたちは

組織を固めすぎてしまいました。

そして再び、

火の柱が動き始めたのです。

しかし、

ウェスレーも、そしてメソジストも

組織に縛られて動けなかった。

その時――

ペンテコステの人々が

火の柱の動きを見たのです。

そして“彼らは出て行った”のです。

その通りです。

ウェスレーの組織を残して、

火の柱の後を追い、

神はウェスレーを

ルターと並んで“棚の上に”置られました。

さて――

やがてペンテコステには

偉大なリバイバルが起こりました。

聖霊の賜物の回復、

癒し、奇跡、御霊の現れが満ちあふれたのです。

しかし今――

再び火の柱が動き始めています。

ところがペンテコステもまた、

組織化されすぎて、

もはや動けない。

兄弟よ――

耳に痛いことかもしれません。

しかし、これは真理です。

組織は固まりすぎ、

結晶のように動かなくなってしまった。

しかし火の柱は、

それでも前へ前へと動いているのです。

そして、

その火の柱に従って進んでいる人々が

確かにいるのです。

ハレルヤ!

私たちは、

約束の地へ向かって進んでいるのです!

その通りです、兄弟。

47 モーセが失敗したとき、

ヨシユアは“火の柱が動く”のを見たのです。

そしてこう言いました。

「さあ、皆! 私たちは道の上にある。」

進んで行こう。」

こうして彼は民を導き、
ヨルダン川のほとりまで連れて来ました。

ああ——

この場面を思うたび、
なんと美しい光景でしょう！
ヨシュアは民に言いました。

「渡る前に、二人の斥候(スパイ)を
川の向こうへ送ろう。」

そしてあなた方もよく知る出来事——
遊女ラハブ の物語があります。

ラハブは

赤いひも(緋の紐)を窓から垂らし、
自分の家を守ったのです。

“信仰によって”

彼女はその日を救いました。
彼女自身と、その家族全員を救ったのです。

城壁は崩れ落ちました——

しかし 彼女の家の部分だけは倒れませんでした。

なぜでしょうか？

そこに“赤いしるし(贖いの血の象徴)”が
掲げられていたからです。

48 あの晩に語ったように——

死の使いが通り過ぎるときのことを思い出してください。

あの時、

家々の戸口には“赤いしるし”が必要でした。

では、

あなたの家の戸口には
この大きな“揺り動かし”が来る前に
赤いしるしがついているでしょうか？

主はこう言われました。

「もう一度だけ、
地だけではなく、

天をも揺り動かす。」

そしてヘブル書は言います。

「私たちは、揺り動かされることのない

御国(キングダム)を受けている。」

アーメン、それは真理です。

私たちは、まさにその時代のただ中に

生きているのです!

さあ、よく見てください……。

49 私は、若き指導者ヨシユアの姿を見る思いがします。

神が彼にお会いになり、こう告げられました。

「恐れてはならない。

わたしの僕モーセは死んだ。

しかし、あなたは立ち上がり、

このヨルダンを渡りなさい。

あなたの生きている間、

どんな者もあなたの前に立ちはだかることはできない。

モーセと共にいたように、

わたしはあなたと共にいる。

恐れるな。

強く、雄々しくあれ。」

ああ、なんという言葉でしょう!

私はその時のヨシユア——

小柄で、謙遜な、しかし戦いの勇士

が静かに歩き回っている姿が目には浮かびます。

彼はイスラエル中の民を呼び集め、

ヨルダン川を見下ろしました。

そのときは 収穫の月、アビブの月(4月) でした。

ユダの山々で雪解けが始まり、

溶けた雪が流れ込み、

ヨルダン川には 轟くような大水 が押し寄せていました。

激しく流れ落ちる大河——

その前に立つヨシユアとイスラエル。

まさに、神の“約束の成就”の前夜でした。

50 この前もお話ししましたが――

私たちの兄弟たちが最近あの地に行き、
その時の様子を収めたフィルムがあります。
彼らは向こうで集会をしていたわけではありません。
ただ、私がこれから行う集会のために
“下見”として通り過ぎただけでした。
だいたい四十人ほどの一行でした。
ところが彼らが
あの場所――ヨルダン川――に着いた瞬間、
大声で叫び出し、
まわりの草木が揺れるほどに
喜びの叫びをあげたのです。
そしてさらに――
イエスがヨハネから洗礼を受けられた“その場所”に立つやいなや、
全員が感極まって叫び出し、
次の瞬間には川へ飛び込み、
互いに、もう一度バプテスマを施しあったのです。
その通りです。
ああ……
そういう場所に立つとき、
人の魂を奥底から揺さぶる何かが
確かにあるのです。

51 ナザレン派の皆さんならよくご存じの バディ・ロビンソン兄弟の話をしましょう。彼があのだに行ったときのことで。ロビンソン兄弟は、古いフォードのT型車に乗って、イスラエルの子どもたちが歩いたまさにその道を進んでいました。すると突然、彼は叫んだのです。「ハレルヤ！ 止めてくれ！もう我慢できん！」運転を止めるやいなや、彼は車から飛び降り、車のまわりを走り回り、全力で叫びながらぐるぐる回り続けたのです。そしてさんざん走って叫び、ふたたび車に乗り込み、「さあ、もう一度エンジンをかけてくれ！続けようじゃないか！」と言ったのです。

52 何かがあるんです！

ハレルヤ！
それは何でしょうか？
ここの“深み”が、
外にある“深み”を呼んでいるのです。
兄弟よ、私はこう信じます――
この内側に“深い呼び声”があるとき、

必ずその呼び声に応える“深み”が

どこかに存在しているのです。

人間の心の中に、

“神のために前進したい、

何かを成し遂げたいという飢え“がある限り、

それは――

上から、神の側から、

何かが押し寄せてきているしるしなのです。

兄弟よ、

私たちはその時に

極めて近づいているのです。

よく聞いてください、今夜！

私は――

主の御名によって、

このように信じます。

これまで私たちが見てきたことは、

これから神がなさろうとしている“ことの大きさ”に比べれば

ほんの小さな前触れにすぎない。

これから、

あなたがたは

偉大な神の御業を

聞くことになるでしょう。

53 私は今、ヨシュアの姿を見る思いがします。

彼はそこに立ち、川を見つめています。

どうやって、この川を渡るのか――？

彼らの前には、

激しく濁ったヨルダン川がうねり流れています。

見てください。

当時の彼らには、大きなアーチ橋も、

鋼鉄の構造物も、

橋を建てる木材も、

そのどれ一つとしてありませんでした。

それらを造る技術も道具も、

彼らには持ち合わせていなかったのです。

しかしヨシユアは、

濁流のヨルダンを見つめ、

そして背後に広がる

何千、何万というイスラエルの民を見ました。

そしてこう言ったのです。

「神が道を開かれる!」

神が“約束された”からです。

54 神が約束されたなら、

神は必ずその御言葉を守られます。

もし神があなたを癒すと約束されたなら、

神はそれをなさいます。

もし神があなたに聖霊を与えると約束されたなら、

神はそれをなさいます。

あなたはただ

悔い改め、

イエス・キリストの御名によってバプテスマを受け、

信じて来なさい。

そして、

何が起こるか見ていなさい。

そのとおりです。

あなたは

聖霊で満たされるのです!

神はご自身の御言葉に対して

責任を負っておられます。

神は御言葉を取り消すことはできません。

神であられるためには、

御言葉を守らなければならないのです。

神は

必ず

ご自身の御言葉を成就されます。

55 さて――

ヨシユアがそこに立ち、

まわりを見渡している姿を
思い浮かべてください。
ああ、なんという光景でしょう！
そして私たちも、
いつの日か同じ場所に立つのです。
道の終わり——
濁ったヨルダン川のほとりに。
今夜あなたは健康で、
何も問題がないかもしれません。
しかし、
いつの日か——その時は必ず来ます。
医者があなたの部屋に来て、
静かにこう言う日が来るのです。
「これ以上、私たちにできることは何もありません。」
その脈は
「袖の中へすべり消えていくように」
弱くなり……
若さの日々はすでに過ぎ去り……
何かがあるあなたを打ち、
医者は肩を落として言うでしょう。
「もう、どうすることもできません……
お気の毒ですが……
まだ若いのに……
しかし、手の施しようがありません。」
そして医者が部屋を出て行くと、
あなたは感じるでしょう。
死の冷たい霧が
静かに、しかし確かに
部屋の中へ漂い始めるのを。
その時——
あなたの前に広がるヨルダン川は、
濁り、荒れ、
とても渡れそうに見えないでしょう。

ああ、主よ……!

56 どうか皆さん、

ヨシュアのようにありますように。

ヨシュアは丘の向こうを見ました。

そこには——

契約の箱(アーク)がありました。

それは“仲保者(なかだち)”となるものでした。

彼と、彼らのあらゆる困難との間に立つお方です。

そして今夜——

私たちにも 契約の箱があります。

それは 主イエス・キリスト。

死と私たちのあいだに立ってくださる

仲保者です。

ある日、

私たちの体から

最後の息が離れようとするその時——

私はこうしたいのです。

ヨルダン川へ走り寄って言いたい。

「どいてくれ、ヨルダン!

私は主に会いに渡って行くのだ!」

私は信じています。

明けの明星(モーニングスター) が

死の陰の谷を照らし、

道を明るくし、

そして 聖霊(ホーリーゴースト) が

その輝く二つの翼を広げて

ヨルダン川を越え、

疲れた私たちの魂を

もっと良い国へ運んでくださると。

アーメン。

さて——

よく聞いてください。

57 そして、ヨシュアは見渡しました。

彼は 契約の箱 を取り、民に言いました。

「ここに集まりなさい。

明日のために自分を聖別しなさい。

準備しなさい。

あなたがたは明日、神の栄光を見るであろう。」

ヨシュアは知っていたのです。

神が共におられることを。

それから彼は祭司たちを呼び、

まず 神を先に立て ました。

契約の箱は、祭司より前に、

そして民より先に。

さらにヨシュアは、

民に一定の距離を保たせ、

神の箱が先を行くように しました。

兄弟姉妹よ、

あなたが何を するにも

“神を第一に置く” なら、

必ず正しい結末に導かれます。

神を第一に置きなさい。

祭司たちは契約の箱を担いで進みました。

そして――

祭司たちの足がヨルダンの水に触れた瞬間、

神はその川の流れを押し返されたのです。

水はせき止められ、

壁のように立ち、

イスラエルは

乾いた地を渡って行きました。

そして彼らは向こう岸で

キャンプを築いたのです。

58 ヨシュアはその数日後、

あたりの様子を見て歩いていました。

神が彼らの上に恐れを置かれたので、

エリコの周りに住むパレスチナ人たちは

皆、門を閉ざし、沈み込んでいました。

ヨシュアが歩いていると、

ふとあるお方を見ました。

ヨシュアは剣を抜きました。

するとそのお方も剣を抜かれました。

ヨシュアは言いました。

「あなたは、私たちの味方なのですか？

それとも、我々の敵の側なのですか？」

するとそのお方は答えられました。

「いや、わたしは主の軍の長である。

汝の足から履物を脱げ。

汝の立っているその地は聖なる地である。」

ヨシュアはそこで

主の軍勢の大將、主イエスに

顔と顔を合わせて出会ったのです。

そして主はヨシュアに

何をすべきかを示されました。

城壁のまわりを行進せよ。

ラッパを吹き鳴らし、

声をあげて叫べ。

そうすればエリコの城壁は崩れ落ちる。

その通り、

イスラエルはパレスチナの地を取り、

神が約束されたその地に

しっかりと住み着いたのです。

なぜなら、

神の約束は

彼らのためのものだったからです。

59 さて、兄弟姉妹よ。

今夜、私たちもまた約束の地へと向かっている旅の途上にいます。

あと数分すれば、

このバプテスマの池で、

罪の赦しのために――

主イエスを信じて――

幾人かの方々を水の中に葬ります。

そして私はこう申し上げたいのです。

もしあなたが、

キリストにある「召し」と「選び」を

まだ確かなものとしていないのなら、

どうか今夜、それを確かなものにしてください。

あなたは言うかもしれません。

「でも、ブラナム兄弟、

神様は私なんか望んでおられないでしょう。

私なんて価値がないんです。」

――いいえ、そんなことはありません。

あなたには価値があります。

神はあなたをお望みです。

60 少し前のことです。

テネシー州にある博物館に立って、いろいろな展示物を見ていました。

その中に「人間の身体を分析した表」がありました。

体重およそ50ポンドの成人男性――

その身体に含まれる化学成分の値段はいくらだと思いますか？

84セントなんです。

たったの84セント。

体重150ポンドの人でも、身体を化学物質として換算すれば

たった84セント。

わずかなカルシウム、

ちよつとした白粉(しろこ)でニワトリの巣を白くする程度の石灰、

そんなものを合わせても、値段はわずか84セント。

ところが人間は、

その84セントの身体に100ドルの毛皮のコートを着せ、

50ドルの帽子を頭に乗せ、

鼻先を空に向けて、

まるで自分が大した者であるかのように歩き回るんです。

その展示を見ていた男性がこう言いました。

「なあ、ジョージ……俺たちって、たいした価値ないんだな。」

私は振り返って言いました。

「確かに、君の“身体”は大した価値じゃない。

だがな——

君の魂は“何千万の世界”よりも価値があるんだよ。

それをどう思う？」

その男性は筋肉を誇らしげに見せていましたが、私は続けて言いました。

「身体は84セントだとしても、魂は計り知れない価値があるんだ。」

人間というのは、本当に

自分が何者かを誇りたがるものなんですね。

61 少し前、西部の方で集会をしていたときの事です。

ある古い牧場主の家に、夕食に招かれました。

その家族の何人かは、主によって癒されていたんです。

その牧場主は私に一枚の小切手を差し出してきました。

それは——もし私が受け取る気になれば——

このタバナクル(礼拝所)を四十五棟も建てられるほどの額でした。

しかし私は言いました。

「私はあなたのお金をいただくつもりはありません。」

同行していた兄のハワードが私に言いました。

「ビル、なんであの小切手を受け取らなかったんだ？」

私は答えました。

「私は彼のお金が欲しいわけじゃない。

私は“日ごとに主の恵みに生きたい”んだ。

お金が目的じゃない。

私はただ、主イエスにお仕えしたいだけなんだ。」

62 あのカルフォルニアで——外であの婦人が癒された時のことを、彼(ハワード)はそばで見っていました。メリキアン一家の件です。

ルイビルの新聞にも載ったのを、あなた方もご覧になったでしょう。

その後、あの代理人たちの二人が、ここへやって来ました。

百五十万ドル(1,500,000ドル)——その大金を持って、当時私が住んでいた“二部屋きりの小さな小屋”にやって来て、それを私に差し出したのです。私は言いました。「私はそれを“見ることさえ”したくありません。

いいえ、いりません。——いいえ、絶対に。」“金銭を愛することは、すべての悪の根です。”あんなものからは、遠ざかっていなさい。

63 その牧場主が、家から出て来てこう言いました。「ブラナム先生？」

「はい、そうです」と私。彼は山々を指さして言いました。

「向こうに見える、あの山々が見えますか?」「ええ、見えますよ」と私。「どのくらい離れていると思いますか?」「さあ、分かりませんね。」

「八十マイルあります。」それから彼は続けました。

「わしは、あそこまで全部持つておるんです。あれより向こうまでも。あれは全部、わしの放牧地です。」
「まあ、それはすごいですね」と私。

すると彼はまた指を向けました。「ほら、あそこに町が見えるでしょう? あの町の銀行はわしのもんです。あの辺一帯も全部、わしの土地です。そしてこの反対側も……」そう、彼は自分の所有しているすべてを語り続けました。私たちは、小さなステーションワゴンの前で止まりました。

私は彼を見て、とても立派な人だと思いました。そして彼の肩にそっと手を置いて、言いました。「兄弟、ひとつ質問させてください。」

「いいですよ。」私は天を指さし、こう尋ねました。

「では……あの方向には、どれだけ所有しておられますか?」

彼はしばらく黙った後、言いました。

「ブラナム兄弟……わしは、あそこには何ひとつ持っていません。」

私は言いました。「兄弟、そこにこそ、私の宝は置いてあるんです。」

私はこの地上には、ほとんど何も持っていません。『テント一つ、粗末な小屋一つでも、何を気にすることがありましよう?向こうでは、わたしのために宮殿を建ててくださっているのですから。ルビーもダイヤも、銀も金も、主の宝庫は満ちあふれ、量り知れぬ富で満ちている。』そのとおりです。本当の富は“あちら”にあります。“あなたの宝のあるところに、あなたの心もある”——アーメン。」

64 ある時、ジプシー・スミスのために“愛の献金”が集められていました。

その夜、彼が建物の後ろを歩いて帰ろうとした時、みずぼらしい小さな女の子が立っていました。衣服は破れ、ほんとうに貧しさがにじみ出ていました。

彼女は何かを握りしめ、「スミスさんにお会いしたいんです」と言いました。

ジプシー・スミスは優しく言いました。

「どうしたの、かわいい子?」

その子は言いました。

「スミスさん……わたし、お金がなかったから献金ができなかったんです。」

でも……一か月くらい前、クリスマスに、誰かがわたしにキャンディの棒(ロリポップ)をくれました。

スミスさん、わたし……あなたのことが大好きなんです。

お父さんも救われて、もう酔っぱらいじゃなくなりました。

だから……このロリポップをあなたに差し上げたいと思ったんです。」

ジプシー・スミスはそれを受け取りました。

手の中に置いた瞬間、涙が頬を伝って流れ落ちました。

そして、女の子の小さな手をやさしく撫でながら言いました。

「かわいい子よ……」

今夜の献金の中には、何千ドルもの小切手がある。

けれど、この贈り物ほど尊いものは一つもない。

これは君の“小さな、へりくだった心”から出てきたものだからね。」

ああ、なんと！

65 今夜、皆さん——

あなたがどれほど何かを持っていると思っけていても、

もともと私たちは“何者でもない”のです。

だったら、持っているものすべてをキリストにおささげしたらどうでしょうか。

さあ、一緒にこのヨルダンを渡りましょう。

向こう岸へ行って、その地を受け継ぎましょう。

「でも、兄弟よ、この町で私はいいい仕事を持っているんです。

私はこの町のある組織に属しているんです。」

——あなたは、いったい何者だというのでしょうか？

あなたの持っているものを、全部主にお渡ししなさい。

さあ、今夜このヨルダンの川辺に集まって、渡る準備をしましょう。

約束の地へ向かいましょう。

主があなたを助けてくださいますように。

私はそう祈ります。

では、頭を垂れましょう。

もう少し長く説教できれば良いのですが、声が枯れてしまいました。

でも大丈夫です。

さあ、一分ほど頭を垂れて祈りましょう。

66 主なる神よ——

今夜、私たちはヨルダンのほとり近くに立っています。

あの濁った波が向こうで押し寄せています。

私たちは皆、いつか必ずあそこへ降りていかねばならないことを知っています。

あの向こうには、誰にも避けられない、

“死”と呼ばれる大きくて黒い、深い扉があります。

人が皆そこへ入っていく、あの扉です。

そして私は知っています——

私の心臓が一度鼓動するごとに、

私はその扉に一步ずつ近づいているのです。

主よ、私も、そしてこの場にいるすべての男も女も、

少年少女でさえも、
必ずあの場所に来なければなりません。
あとどれくらい先なのか、
それを知っておられるのはあなただけです。
しかし主よ、私は
臆病者のようにそこへ行きたくありません。
「主よ、あと数日ください、悔い改める時間をください」
——そんな叫び声を上げながら、
あの場所へ行きたくはないのです。
私は勇士のように、あの場所に向かいたい。
かつてのパウロのように、こう言いながら向かいたいのです——
「私は、主の復活の力のうちに主を知っている」と。
ある牧師と握手したからでもなく、
教会名簿に自分の名を書いたからでもなく、
頭に数滴の水を振りかけられたからでもない。
私は、主の復活の力によって主を知っていたいのです。
そうすれば、主が私の名を呼ばれる時、
私は死人の中から立ち上がることができるからです。
ああ神よ——
今夜ここにいるすべての心の願いが、
そのようでありますように。

67 主よ——

もし今この場に、
あなたをまだ“罪の赦しの恵みのうちに”知らず、
その名が子羊のいのちの書に書き記されていない
男の人、女の人、少年少女がいるなら、
どうか 今このときに 決心できますように。
父よ、どうかお与えください。
私たちは、人々を愛しています。
そしてあなたは、この働きをどこにおいても
証しとし、確証を与えてくださいました。
だからこそ、私たちはあなたが
今ここにおられることを知っています。

そして私たちは、イスラエルが
ヨルダン川を渡ったあの時を思い出しています。
なぜ彼らは渡れたのでしょうか？
それは、あなたが約束し、
あなたご自身がその地を彼らに与えられたからです。
そして——
あなたは私たちにも与えてくださっています。
主よ、どうか今夜、
私たちも立ち上がり、
あなたが与えてくださった
私たち自身の受け継ぐ地を取りに行くことができますように。
主よ、どうかそのようにしてください。

68 頭を下げたままで——

今夜、この中にこう言う方はいないでしょうか。
「ブラナム兄弟……
私はヨルダンを渡りたい。
向こう岸へ行きたい。
だけど、まだ自分は整えられていない。
このままでは、主にお会いするのが恐ろしい。
どうか私のために祈ってください、ブラナム兄弟——
そう願います。」
そう心から言いたい方は、そっと手を上げてください。
私は祈ります。必ず祈ります。
——手を上げてください。
どなたですか？
……神があなたを祝福されますように。
ああ……あちこちで手が上がっています！
ほかにいませんか？
「ブラナム兄弟、私のために祈ってください。」
——神があなたを祝福されますように。
神があなたを祝福されますように、姉妹。
神があなたを祝福されますように、小さな娘さん。
神があなたを祝福されますように、少年。

神があなたを祝福されますように、あなた。

はい、そちらの後ろの方も……

神があなたを祝福されますように。

ほかに、手を上げる方はおられませんか？

69 皆さん……よく聞いてください。

これがあなたの生涯で、最後の福音の集会になるかもしれません。

私が旅から帰ってくるたびに、妻のメダが言うんです。

「ビル、あの人のこと覚えてる？」

「うん、覚えてるよ。どうしたんだ？」

「亡くなったの。」

「えっ？」

「この人は事故で。あの人は心臓発作で亡くなったの。」

私は思わず言います。

「そんな……信じられない！」

するとメダが続けるのです。

「本当なの。」

仕事から帰ってきて、靴を履こうとしたその時に倒れたのよ。

事故で即死した人もいるし、

眠りについたまま、二度と目を覚まさない人もいるの。」

そのたびに私は胸に手を当てて思います。

ああ……あの人に、あの夜、私は招きの呼びかけをした。

彼はそこに座っていた。

あの女性も……あの若者も。

私は彼らに語ったのに……。

70 さて——どうか誤解しないでください、友よ。

あなたは今夜、本当に自分が罪人だと分かっていますか？

よく聞いてください。

もしあなたが新しく生まれていないのなら、

あなたは今もまだキリストから離れているのです。

では——

あなたは主イエスをお受けしたいですか？

そう願う方は何人おられるでしょうか。

今夜、ここでは皆さんが前に出て来るだけの「祭壇のスペース」はありません。

しかし、もしあなたがただ 立ち上がる なら、

「ブラナム兄弟……

私は立ち上がることによって証します。

今、キリストを私の救い主として受け入れたいのです。

今までの古い生き方から離れたいのです。」

——そう表明することができます。

どうか、あなたの心に正直でいてください。

そして、その思いが真実であるなら、

いま立ち上がってくださいますか？

71 どうか、あなたの心に正直であってください。

そして——立ち上がれますか？

最初に立ち上がる方はどなたでしょうか。

「私は受け入れたい。今、キリストを受け入れたい。」

そう言う方——

……神があなたを祝福されますように、兄弟。

はい、そこに三人の男性が立っています。

神があなたを祝福されますように。

姉妹、神があなたを祝福されます。

どうか、そのまま立っていてください。

ありがとうございます。

ほかにも——

神があなたを祝福されますように。

神があなたを祝福されますように、息子さん。

ほかの方は？

神があなたを祝福されますように、兄弟。

誰かほかに、立ち上がってこう言う方はおられませんか。

「私は今キリストを受け入れたい。

このままの状態から抜け出したい。」

——神があなたを祝福されますように、兄弟。

後ろの方、赤ちゃんを抱いたまま手を上げているあなた——

神があなたを祝福されますように、姉妹。

どうか立ったままでいてください。

ほかに、今すぐ立ち上がれる方はおられませんか？

こちらの方々——

それから、前の方の子どもたちもどうですか？

若いご婦人、神があなたを祝福されますように、姉妹。

若い方たち、神があなたを祝福されます。

どうぞそのまま立っててください。

小さな女の子、神があなたを祝福されます。

ほかに、キリストを受け入れたい方は立ち上がってください。

——そうです。神があなたを祝福されます。

神があなたを祝福されます。

立ち上がってください。

そして誰か、こう言う人はいませんか？

「私は今キリストを受け入れたい。

ブラナム兄弟、どうか私を覚えて祈ってください。

今、このときです。」

——立ち上がれますか？

あなたを待っています。

「私はキリストを受け入れたい。」

あなたは、自分が罪人であることを知っていますか？

(ブラナム兄弟は続けて招きの祈りと導きを続けていきます……)



www.messagehub.info

説教の語り手

ウィリアム・マリオン・ブラナム

"...第七の御使が吹き鳴らすラッパの音がする時には、神がその僕、預言者たちにお告げになったとおり、神の奥義は成就される。" 黙示録 10:7